

# 町村新報

## 石城名勝舊蹟を尋ねて

吉成 劍 突 坊

慶長年間平城主鳥居忠政、水害防止祈願のために、鎮座せられたといふ、白土の村社三高八幡神社を拜して、夏井村に出る。本村の各大字が何れも夏井川沿岸に位置するので、村名を立つとある。

専稱寺 夏井村大字山崎にあつて、境内頗る高丘平町を距る東方約一里、浄土宗梅福山と號す。

境内へ登る一足づづの汗  
慶永二年良就證上人の開山で、上人山城國男山に生れたが、幼より奥州に下りて、良山上人に就き習學。或時一夜石森觀音に參籠せられしに、夢告があつて經營したとある。

専稱寺夢に繪圖面出來上り

六代良大仰觀上人の時、延徳二年六月、後土御門天皇より勅願所の繪旨を賜つて奥州總本山と稱するに至り、幕政の時には寺領七十石を有したといふ。郡内屈指の名刹で、結構莊麗、規模の宏大なること、開山當時の有様も想像するに難くない。斯る由緒正しい寺院のごとて什寶も亦豊富で、國寶の價値あるものも數多あつたそうだが、寛文九年の回祿に悉く烏有に歸してしまつたそう。

什寶の灰でやたらに草が生え

形容も話も出來ぬ勝地なり

如來寺 専稱寺の東方にあつて松峯山と號し、浄土宗准檀林である。舊名矢の目村といつたところから、一般に矢の目如來寺と言つた方がわかり易い。名越善道上人の法孫良山が、矢目、荒田目等の領主大江氏の歸依によつて、元享二年に開かれた道場で奥州浄土宗最初の本山たりしを、専稱寺に一切を譲りて競争などといふイガミ合を水に流したとは美しいことである。

發行日 毎月二回 十五日刊

編輯兼印刷發行所 酒井秀吉

發行所 福島縣石城郡磐崎村大字

下湯長谷勝善三十八番地

町村新報社

定價 一冊七錢(郵税別)

一ヶ月十四錢(郵税別)

三ヶ月四十錢(郵税別)

半年七拾錢(郵税別)

一年一圓二拾錢(郵税別)

廣告料 別色刷 四十錢

## 募 集

### 各町村駐在記者

希望者ハ自筆履歷書

御送附ヲ乞フ

### 町村新報社

得度して喧嘩しないは佛様  
幕政の時寺領二十石を有し、傳來の寶物頗る多く中でも絹本着色繪畫、阿彌陀三尊像一幅と、彫刻銅造阿彌陀如來、兩脇侍立像三軀は、近年國寶に指定された世上稀有の逸品、夙に覽者の激賞を博して居たものである。

國寶にあがる如來の御姿

愛谷渠碑 如來寺の近き愛谷側にある黒花崗岩で、厚さ七寸幅三尺五寸、高さ六尺三寸、大須賀篤軒翁の撰文に、副島種臣伯の篆額、正四位勳三等金井之恭書とし明治二十七年十月と刻す。今碑文の一部を直譯して其の内容を明かにしよう。

(前略)承應中澤村勝爲、小川江を開鑿して民の塗炭を救ふや、譏者のために斃る。水守治右衛門氏また内藤侯の微臣たり、勝爲の業遂げざるを慨き奮然躡起身を以て自ら任じ、寛文の初め小川渠を改修して大室、大森の二洞を鑿つ。延寶中新に此の渠を以て磐前郡に灌がんと決す。渠を愛谷に起して夏井川に堰し、長さ七十六間の巖脚を洞して水を容る。水勢奔放東南川中子に至る。好間川を劃し前には乃ち槽を架すること長さ百七十尺繞りて平町の東に出づ。支流町を貫きて長橋に漑ぐ。幹流槽を古川に架し、専稱寺の麓を環りて、山崎、菅波、荒田目、上、下大越、藤間に漑ぐ、南下高久に至り槽を荒川に架し、餘流を導きて沼之内に漑ぐ。迂餘曲直長さ四里五丁有餘、胴門大小十四、陰規百九十八、灌田五百十町餘歩。是に於てか二郡の水利始めて濶くして澤村氏の遺志全く成る。稱するに上下渠といふ、地勢の精測疏導の周到、後世以て加ふるものなし。(下略)

永遠に流れて盡きぬ水の音

國寶を見てから石を賞めて讀み

大國魂神社 大字菅波の地に鎮座する縣社で、事代主命、大己貴命、少彥名命を祀り、延喜式神名帳

に列せられた古社であるだけ、鎌倉乃至南北朝時代の古文書二十餘通を藏せらる。元祿中領主内藤義孝これを裝軸して社寶とせられたのが今に傳へ、嘗つて帝國大學の歴史編纂資料に採録された貴重のものである。

延寶中たま／＼社側の地を穿つに當り、管玉や、鬼角と稱するものを石室の中に獲たとふのがこれも社寶として藏せらる。

此の地も國魂といふ里落であつて、即ち國魂神を祭つたところを見れば、古へ此處に國造を置かれたことと思はれる。

社前に相生松といふがあつて、雌雄二幹同根より生じ、翠蓋亭々雲上を摩するの概がある。古來諸婚の靈瑞ありとて、青年男女の賽するもの多しといふことだ。

神様にかしは手をして錢を投げ  
矢の根石くららないかと目をくぼり  
面赤く成つて相生松に寄り  
そつと來てそつと歸るも面白し

兜塚 大國魂神社より程遠からぬ甲塚と稱するところの田間にあつて、其の形恰も兜を張つたやうに見ゆるところから、此の名があるといふ。面積八畝歩許りで、其の上に老松一株がある、高さ三丈餘の廻り一丈五尺許り、翠蓋數十歩に張り、枝葉翁鬱として宛も小や林のうに、八面殆んど同じ觀ゆるので八方眺みの俗稱がある。由緒に／＼の説はあれど、古制によれば山陵必らず宮車に象るとあり、これは即ち兜に象れるが故に武官の塚にして、**岩城國造** 建古呂命の墳塚だといふのが有力のやうだ。

考 古家を八方にらむ兜塚  
延館墟址 大字下大越にありて又の名を長者平ともいふ。谷を二丁程登ると、土地が平坦になつて南北凡そ七十間、東西凡そ四十間、四方に掻き上げた土居があつて、其の陰を見ると小溝らしい跡がある東西は何れも谷で、西の土居から小經を南行すると高久村に至る。西方の谷を隔て、**大承峰**といふ山があり、北方の眺望頗る廣い。傳へて**岩城國造**の墟といふことは夙に識者の認むるところで亦疑ふ餘地はない。今は多く鋤かれて麥龍桑圃と化したのが尙ほ形跡は歴然として居る。尙ほ此處から三丁許り行くと白岡前と稱する耕田の中に一區の茶地があ

る。此處から敗瓦累々として出で、又斷礎四五確乎たるものがある。傳へて**堂塔の遺址**といひ、近頃保護に指定されたやうに聞いた。今、村社白山社々掌鈴木氏の家に藏する土器三個、石斧七個、石簇八個、勾玉一個、及古瓦數個がある。古社寺保存會委員工學士關野貞氏の鑑定によると、土器はコロポックル人種の製作で、少くとも三千年内外のもの、又古瓦は奈良朝時代の製作で千二百年内外のものと言はれて居る。

徳利のカケラに鐵の手を止め  
踏み進む行く手はみんな麥島  
久保中山觀音 飯野村大字中山にあつて札所十六番に當る。

中山ときいてのぼりて朝日さす  
森のこかげにたつは白なみ  
あさひかた夕日にもれし中山は  
波のひゞきにまづ風の音

龍澤觀音 飯野村南白土大龍寺にありて札所二十番に當る。  
山高くなを佛の龍澤や  
流れのするのつきぬあはれみ  
下大越觀音 夏井村下大越安祥院にあつて札所十九番に當る。

面白やたづね來て見ようしんじ  
くれなる梅にますがたの池  
夏井川 田村郡より來りて石城郡夏井村下大越に至り大海に注ぐのであるが、夏井川の流域一里七町五十七間、仲秋の候になると鮭の漁が多く、其の捕獲する狀況頗る壯觀である。

維新前は鮭川御連上場と稱して、沿岸の各村より川頭なるものを選び、之が漁業の指揮をさせたが、維新後になつて夏井草野の兩村の漁業者共同し、頭取を選定して其名儀に納金を納め、交互に漁業を營ましめたといふことである。

明治四十三年になつて上流各村と組合の規定を設け天然孵化場を平町鎌田川に設けたるも良好ならず、更に明治四十四年に至り、相馬郡新田川鮭魚孵化場に倣ひ人工孵化場を研究し、同場から卵種十萬餘を取寄せ大字上大越字五味作孵化場に於て孵化せしめ育成長するに及び第二孵化場を大字荒田目に設けて飼育したところが、其成績頗る良好である。今尙盛んに行なはれて仲秋の季節を賑はしてゐる。